奈良県教育ジャーナル

ならの教育

～これからの学びをみんなで考える～

創刊号
令和5年3月

P2~P4 対談「これからの教育は何を目指すべきか」
奈良県知事×松本所長（国際高等研究所）

P5 奈良県教育長からのメッセージ

P6・P7 県内学校の取組紹介
・王寺町立王寺北義務教育学校
・王寺町立王寺南義務教育学校
・奈良県立大学附属高等学校

奈良県・奈良県教育委員会

吉野町では、こども園、小学校、中学校を通して、木育の取組を行っています。よしのこども園では、地元の木材が使われたボールが入ったプールや、積み木など、木のおもちゃが園内にたくさんあり、子どもたちが自由に遊べるようになっています。

松本紘 × 荒井正吾

これからの教育は何を目指すべきか

主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）への注目が高まる今、荒井知事と
国際高等研究所の松本所長に「これからの教育は何を目指すべきか」をテーマにお話を伺いました。

どのような人を育てるか

（荒井知事）

教育の位置づけは時代とともに変わりますが、今、日本の教育の方向性がゆらいでいるように思います。多様化する社会の中で、さまざまな個性を持った人が、お互いを認め合い、尊重しながら生きていくためには、想像力が必要です。想像力は、これまでの教え込む教育では育むことができません。みんなが個性を持って生きられれば、これほどの幸せはないと思います。

（松本所長）

「教育」は「教えること」と「育むこと」ですが、これからは、教えるのではなく、人を育てるという意識で「育むこと」が大切になりますね。日本人は、世界と比べて、大人になっても学びを続けていく人が少ないと言われています。大学に入るまでは、頑張って勉強をするのですが、社会に出てから学ぶことを止めてしまう。学校では、知識を学ぶことが中心になっていて、「なぜ学ぶのか」を教えないからではないかと思います。学校の先生は、どうして勉強するのか、勉強すると何が起こるのかを子どもたちに伝え、生涯を通して学ぶことの価値、意味を理解させてあげてほしいですね。

（荒井知事）

子どもの時代に、学ぶ楽しさを知って、生涯にわたって考え、学び続けられる人を育みたいですね。「教育」は外から得るものですが、内から「学ぶ」力を育てることも大切だと感じます。本人の学びたい心をどう引き出すか。そのために

松本 紘（まつもと ひろし）

公益財団法人国際高等研究所　所長
奈良県出身。京都大学第25代総長として在任中、入試改革、教養教育改革、これからのリーダーの育成といった多くの改革を実行。総長退任後、国立研究開発法人理化学研究所理事長を7年間務め、平成30年4月から現職。

は、学ぶことの価値を実感、体感できる環境をつくることも重要です。

荒井 正吾（あらい しょうご）
運輸省を経て、平成19年度から奈良県知事。現在4期目。

どのように人を育てるか

（松本所長）
子どもは、幼稚園や小学校で、初めて家庭から出て、先生や友達、多くの人に出会います。ここで出会う周りの人はとても大切で、私も小学校の時に、先生に言われたことは、今でも記憶に残っています。先生の役割は、知識を伝えることだけでなく、その人格を感じさせることにもある。子どもたちは先生のことを人柄を含めてよく見ています。

（荒井知事）
本来は、「教えること」より、「育むこと」が主であるべきなのかもしれません。今の時代は、インターネットなどのさまざまな場所で知識を得て学ぶことができるから、先生方には、知識を教えることよりも、「先生も一緒に学ぶ」というスタンスで、学ぶことの楽しさを教えていただきたいですね。私は大人になってから学ぶ楽しさを知りました。今は学ぶことが楽しくて仕方がありません。子どもの頃に学ぶ楽しさを身につけると生涯幸せになれると思います。

（松本所長）
子どもの「なぜ？」をおさえこまないことが大切です。子どもから「これなんで？」と聞かれたときに、これはこういうものだ、で終わらせずに、なぜそうなのかをじっくり一緒に考えてあげてほしい。「AはBである」ということよりも「なぜAはBなのか」という考え方の方が心に残ります。教育者は、教える以上のことを期待されていると思います。

（荒井知事）
「あれ？」と思うことは大切ですよね。「あれ？」と立ち止まってしまうと、試験に受からないから、とにかく覚えよう、詰め込もう、となってしまいがちですが、疑問を持ち、考え続けることが大事だよ、と伝えてあげてほしいです。素直な心がベースにあって、そこに「不思議だなぁ」「なんでかなぁ」と思う心がのびのびと育ってほしい。学びながら自分らしく生きていると、アイデンティティが生まれ、信頼できる友を得ることができます。

（松本所長）
高校、大学と学びを進めていくと、科目が分かれ、学ぶことがより専門的になっていきますが、それと同時に全体をみて関連性をつかむことができなくなってくる。英語の「science」は、日本語では「科学」と訳しますが、「科学」は「科」を細かく分散して追究する印象がありますから、実は「science」と少し違うのでは、と感じています。例えば「社会」と「理科」はどのように関連するのかというような、まとめて全体を捉えるということも大切だと思うのです。

（荒井知事）
覚えた知識が全てのように思ってしまいますが、知識はあくまでも断片であるということですね。そのことを教える側も理解しなければならないですね。知識の断片から全体像にどう迫っていくかということが大切だと感じました。

（松本所長）

大学になると学ぶことはさらに非常に専門的になってきます。総合的に広く学ぶことができるのは、実は、小学校や中学校の時なんです。幼児期から高校までで学んだことが、その人の基礎となり、人格を形成していく。だから広く学んでほしい。「なぜ勉強するのか？」という問いには、「こんなにいろんなことを学べるのは、実は今しかないんだよ」ということも教えてあげてほしいです。

（仮称）奈良県立工科大学の設置について

（荒井知事）

現在、県では（仮称）奈良県立工科大学の設置に向けて準備を進めています。

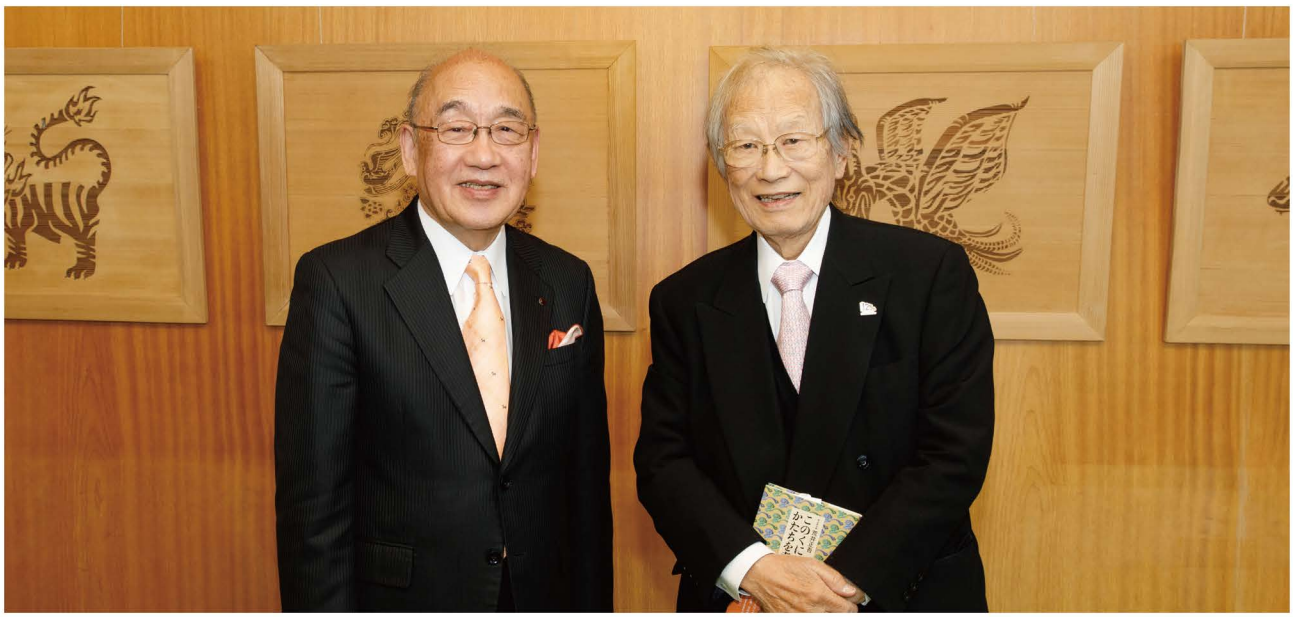
（松本所長）

教育の先には研究があります。日本語の「研究」という言葉は、「研（みが）く」「究める」という意味で、とことん一つのことをやるというイメージですが、英語の「research」は「だめならやりなおしたらいいよ」というニュアンスで、少し違うように感じます。

その点、（仮称）奈良県立工科大学は、従来の「機械」や「電気」といった狭い領域に止まらず、他の分野との融合などにより、幅広い領域、課題に取り組もうとしているのが良いですね。このような分野を越えた学際的な融合から創造力が生まれ、社会の活力につながっていく。「この研究は人々の役に立ちます」と言い切れる人を育て、良い研究をしてほしい。この大学に入って良かった、と思われるような大学をぜひ奈良につくってほしいです。

（荒井知事）

歴史・文化はイノベーションの源になります。奈良は古来から、歴史・文化の融合地点になっていました。大陸から様々な文化が渡来しましたが、奈良はそれをそのまま取り入れるのではなく、創造力を働かせて、新たな融合文化を生み出した。奈良には創造力があり、学びは奈良から始まっているとも言えると思います。そのような奈良に、知の融合で課題にチャレンジする新たな大学が生まれることはとても楽しみです。



奈良県教育長からのメッセージ

奈良県教育長
吉田 育弘
（よしだ やすひろ）
県立高等学校の数学科教員を経て、平成11年度から教育委員会事務局勤務。平成26年度から現職。

主体性を大切に

昨年のサッカーワールドカップは、日本全体が盛り上がり、日本代表はドーハの悲劇から約30年、大躍進した大会となりました。これは、日本代表の森保監督が「主体性」をモットーに代表チームをまとめ上げた成果でもあると思います。サッカーは足でボールを扱うことや守備と攻撃の切り替えが頻繁に起こるなど不確実性の高いスポーツで、選手は何をなすべきかを自分で判断し、行動することが求められます。教育においても主体性は大切なキーワードです。未知の課題に対応するには、指示待ちではなく、自分で考え、自分で解決を目指すことが大切です。

今、私たちの社会は、産業構造や社会システムが急激に変化し、世界的課題の複雑化・不確実化が進み、世界における日本の産業競争力が低下しています。そのような中、Society5.0の到来に伴う社会変革を支える人材の育成が求められています。このため、これまでの学びを見直し、これからの社会を主体的に生き抜くために必要な問題発見・課題解決・創造力の醸成や俯瞰的なものの見方を身に付けさせる学びへ転換を図ることが急務と考えます。

「本人のための教育」の推進

県教育委員会では、「本人のための教育」を推進するために、「奈良の学び推進プラン」を策定し、ICT機器等も有効に活用しながら、子どもたちに対する「指導の個別化」と「学習の個性化」を図り、「個別最適化した学び」の実現に努めています。具体的には、一方的な講義主体の授業形態から、対話型の授業形態に転換し、子どもたちが自ら問題を発見して、解決策を提案・実現する能力を涵養するプロジェクト型の教育のさらなる重点化を目指しています。正しい答えにたどり着くことが重要ではなく、答えにたどり着くまでのプロセスを大切にし、探究的な学びを積み重ね、実践的な課題解決能力を伸ばしたいと考えています。

また、STEAM教育の推進にも取り組みます。今後の社会を生きる上で不可欠になる科学技術の要素と幸福な人間社会を創造する上で欠かせないリベラルアーツの要素を教科の枠組みを越えて学び、「知る」と「創る」の循環により、新たな「知」を構築し、自ら考え抜く力を育むことを目指します。そして、子どもたちが持続可能な社会づくりにつなげる真の力を付けるとともに、時代の変化に柔軟に対応し、自らの人生を創出することができる豊かな力を育んでいきます。

なぜ学ぶのか？

（仮称）奈良県立工科大学学長候補の小寺先生に勉強する意味、勉強すると何の役に立つのか聞いてみました。

学校では授業を受け、教えてもらったことを覚え、問題集をやる。これが勉強なのかな？何のためにやるのかな？といつも思っていました。

元来学問は「何故」というとてもシンプルなもので、それを紐解いていく過程で多くの学問分野に分かれていきました。その分かれたものを別々に教えられるので、何に役立つのか、何のために学ぶのかがわからないのだと思います。

何故気温が変わるのか、何故風が吹くのか、何故鳥は飛べるのに人間は飛べないのか等、身の回りには不思議なことだらけです。その何故を知りたいという要求が、何故を紐解きその結果を利用する分野である理科や数学を産んだといえます。様々な道具や産業は、その何故から生まれた知恵が部品となり、組み合わさって生まれています。出来上がったものを見ると一見複雑ですが、一つ一つは単純です。その一つを理解する行為が「学ぶ」ということだと思います。

学ぶ意味について、身近な例から考えてみたいと思います。

例えば、文字を知らなければ読むこともできません。文字を書くことができなければ遠くにいる人に思いも伝わりません。また、人は生きていく上で自身が経験したことのない場面に遭います。その際、どのように対応するのでしょうか。経験したことのないことなので、一から考えるよりも、過去に同じことを経験した人の知恵を借りた方がより容易に早く対応できます。すなわち、それが文字、言葉、そして歴史を学ぶ意味だと思います。

また、足し算や引き算ができないと、物を買う際に支払いができず、あと何分で電車が来るかわかりません。面積の計算ができないと家を建てることもできません。すなわち、計算ができなければ、「損をする」「やりたいことができない」ということになります。

ただ、学んだものを使わないと面白くないですね。面積の計算や三角関数は何に使うのか？実は教科書の図や絵、問題文に表現されています。ただ、学校の授業では、学ぶ面白さから教えてもらうことは無かったように思います。ちなみに、欧米の教科書には、そのような絵が沢山描かれています。

なぜ学ぶのか。私は、歴史、数学、物理などの「科学」という道具を手に入れて自分で使えるようになるために「学ぶ」のだと思います。

（京都大学 名誉教授　小寺 秀俊）

王寺町がめざす義務教育学校の学び

義務教育学校開校

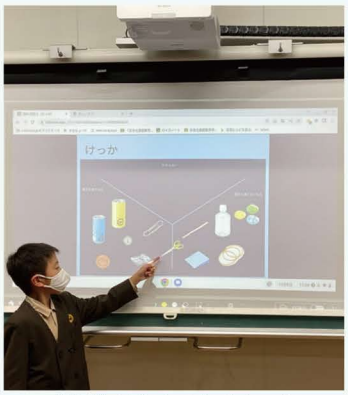
王寺町では『教育のまち王寺』を実現するため、その基盤となる義務教育学校の整備を進め、令和4年4月に施設一体型の王寺北義務教育学校と施設分離型の王寺南義務教育学校の2校を開校しました。

施設一体型、分離型という違いはありますが、「学び続けて未来を拓く　～自律・挑戦・協創～」という教育目標の下、両校とも柔軟で系統性のある小中一貫教育を目指し、日々取組を進めています。

1年生と9年生の交流

教育の充実を図る校舎の整備

これからの教育を見据え、両校共にすべての普通教室と特別教室にスライド式超短焦点型プロジェクターを設置し、さらに10GBの高速大容量の校内通信ネットワークを完備しました。また、多様な学習に対応できるようメディアセンターや多目的教室、多目的スペースを設けたり、子どもたちや保護者、地域の皆さんとの交流を図れるようにランチルームを設置したりしています。



超短焦点型プロジェクターを活用した学習

4-3-2制の学年区分について

本町では、子どもたちの成長の節目やいわゆる「中1ギャップ」の解消等を考慮し、4-3-2制の学年区分を取り入れました。

1～4年生は、学級担任制によるきめ細やかな指導を通して、基本的な生活・学習習慣の定着を図り、基礎的な学力の定着を図る繰り返し学習を重視しています。

5～7年生は、5、6年生に一部教科担任制を導入し、専門性の高い指導により活用する力を育成します。また、5、6年生の部活動への参加など、従来の中学生の活動を経験することにより、中学校生活への不安を解消し、希望を育みます。

5年生から9年生の児童生徒会活動

8、9年生は、義務教育の総まとめとして、子ども一人一人の個性や可能性を高め、進路について考え、併せて、地域の一員として地域社会に参画する力を育成することをめざします。

そして、これからの時代を生きる子どもたちに必要な学力や生きる力を育むため、9年間の系統的なカリキュラムに基づき、1年生からの英語教育やふるさと王寺への理解と愛情を育む「和（やわらぎ）プロジェクト」、AIを活用した個別最適化学習、リーディングスキルテストを活用した読解力の向上等、特色ある教育に取り組んでいます。

低学年用メディアセンター

新しい学校のカタチ

正解のない問い（社会的課題）と対峙し、その解決に向けて行動できる人材を育成しうる学校のカタチはどうあるべきか。これは、教育政策を研究対象とする私の問いでもあります。目の前にいる子どもたちは、AI、IoT、ロボット等、技術革新が急速に進むsociety5.0（超スマート社会）と呼ばれる、これまで不可能と思われたことが可能になる社会を生きることになります。こうした前提に立てば、既成概念や前例踏襲といった思考の枠組みから解放される必要があるでしょう。

知事と生徒との対談

奈良県立大学附属高等学校の挑戦
～探究がひらく未来の扉～

公立大学法人奈良県立大学理事・特任教授
附属高等学校長　石井 宏典

ICTを活用したグループワーク授業

そこで、本学が新たに設置する附属高校では、生徒の主体性と創造性を最大限に尊重するとともに、大学との高度な連携による課題探究型の学びを基軸に据え、2022年4月に県内初となる探究科5クラスの単科高校として船出しました。

探究科ならではの取組

特色ある教育活動として、アカデミックスキルの基礎を学びつつ生徒自身が設定した課題に取り組む「課題探究」を中核に、反転学習を前提とする「アクティブ・ラーニング型授業」の全教科での導入、県立大学講義科目の履修（3年次）や県立大学への特別推薦制度（上限50名）等の「大学との高度な連携」、アントレプレナーを含む人生100年時代に対応する「ライフキャリア教育」、一人一台の情報端末をフル活用する「ICT活用教育」等に取り組んでいます。また、生徒達には、「自立」した個人として、他者や社会に「貢献」し、何事にも「挑戦」することを求め、これを生徒綱領（自立、貢献、挑戦）として掲げ行動規範としています。

県立大学での体験授業

生徒が運営する学校体験会

附属高校教育の将来展望

以上のように、附属高校での学びは、常に生徒主体（本人のための教育）であり、同時に、獲得した能力は社会に還元することを念頭に設計していることから、生涯に亘って学び続ける姿勢の確立や、新たな時代を切り拓くリーダーの育成に繋がると考えています。今後も、検証と改善を繰り返しながら、これからの時代に対応する高校教育モデルの構築に向けて挑戦し続けて参ります。

教育に関する相談窓口（月～金曜日（祝日、年末年始を除く）の 8時30分～12時、13時～17時15分）

相談内容		相談窓口	電話番号
高校の授業料の支援に関する相談	〈公立〉	学校支援課　授業料奨学金係	0742-27-9859
	〈私立〉	教育振興課　私学係	0742-27-8347
	〈県大附属〉	教育振興課　県立大学係	0742-27-8145
高校の奨学金に関する相談		学校支援課　授業料奨学金係	0742-27-9859
教員採用に関する相談		教職員課　定数管理係	0742-27-9852
教員免許に関する相談		教職員課　免許管理係	0742-27-9805
高等学校教育に関する相談		高校の特色づくり推進課	0742-27-9851 0742-27-9853
県立学校の入試等に関する相談		高校の特色づくり推進課　高校教育指導係	0742-27-9851
教育に関わる統計資料について		高校の特色づくり推進課　高校教育改革推進係	0742-27-9853
		学ぶ力はぐくみ課　教育統計係	0742-27-9830
就学前教育及び小・中学校教育に関する相談		学ぶ力はぐくみ課	0742-27-9854
特別支援教育に関する相談		特別支援教育推進室　指導係	0742-27-9856
障害のある子どもの指導・支援に関する相談		特別支援教育推進室　支援係	0744-32-8201
人権教育に関する相談		人権・地域教育課　人権教育係	0742-27-9858
学校と地域との連携に関する相談		人権・地域教育課　地域教育係	0742-27-9837
社会教育に関する相談		人権・地域教育課　社会教育係	0742-27-8018
学校体育・部活動に関する相談		健康・安全教育課　学校体育係	0742-27-9861
学校保健・学校安全・学校給食に関する相談		健康・安全教育課　健康教育係	0742-27-9862
不登校等教育相談窓口に関する相談		教育研究所　教育支援部　相談係	0744-33-8904
学校の指導に関する相談		教育研究所　教育支援部　指導・支援係	0744-33-8908
いじめに関する相談		教育研究所　教育支援部　指導・支援係	0744-33-8908
		人権・地域教育課　人権教育係	0742-27-9858
私立学校に関する相談		教育振興課　私学係	0742-27-8347

奈良県立教育研究所の相談案内

電話

あすなろダイヤル 0744-34-5560 , 24時間子供SOSダイヤル 0120-0-78310

対　象　児童生徒、保護者、教職員

日　時　24時間年中無休。ただし、平日午前9時～午後5時以外の時間は、「奈良県いのちの電話」に転送されます。

＊不登校やいじめなど学校生活での悩み、子育てなど家庭生活での悩みに電話でお応えします。

メール

『悩み なら メール』で検索

対　象　児童生徒

＊２４時間年中無休受付　数日以内に返信が届きます。

＊学校生活・家庭生活・友達や進路に関する悩みにメールでお応えします。

来所

来所教育相談 ※相談はすべて予約制です

対　象　児童生徒、保護者、教職員　　日　時　平日　午前９時 ～ 午後５時（木曜日は午前のみ）

相談時間　初回８０分、２回目以降５０分

＊親子並行面接を行います。＊不登校やいじめなど学校生活での悩み、子育てなど家庭生活での悩み等にお応えします。

申込み　あすなろダイヤル　0744-34-5560　（平日　午前9時～午後5時）

〈発行者〉

奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課
〒630-8502 奈良市登大路町30　TEL：0742-27-9853

奈良県文化・教育・くらし創造部教育振興課
〒630-8501 奈良市登大路町30　TEL：0742-27-8919